日本郭沫若研究会事務局
二〇〇七年一月十日発行

郭沫若研究会会報

第九号（総No.10）

日本郭沫若研究会事務局
二〇〇七年一月十日発行
〒八六二−八六八〇熊本市大江二−五−一
熊本学園大学外国語学部岩佐研究室気付
電話〇九六−三六四−七〇九八（直通）
FAX〇九六−三七二−〇七〇二

目　次

【古代文字研究】
郭沫若の十二支起源研究（二）・・・・・・・・・・・・成家徹郎
【エッセー】
郭沫若のロマンチシズム―「炉中煤」から思いつくこと・・岩佐昌暲
丸山昇氏と郭沫若研究・・・・・・・・・・・・・武　継平
郭沫若と朝鮮・・・・・・・・・・・・・・・・藤田梨那
戯曲『屈原』の中国における出版史・・・・・・・・・・権　五明
【翻訳鑑賞】
矛盾の統一・・・・・・・・・・・・・・・・大高順雄
【第三回日本郭沫若研究会総会報告・その他】・・・・・・・事　務　局

郭沫若の十二支起源研究（二）

バビロニア天文学（1）

成家徹郎

郭沫若は、十二支の起源はバビロニア天文学にあると考えた。よってまずバビロニア天文学について知らなくてはならない。その際に彼が主に利用した文献はエレミアス Alfred Jeremias の『古代オリエントの精神文化』Handbuch der Altorientalischen Geisteskultur である。この本はその書名からは推測できないくらい、オリエントの天文学が主要部分を占めている。また天文に関連する画像などをたくさん挿図として掲載している点でも有用な文献である。エレミアスはメソポタミア出土遺物の中から、天文に関連する画像を実に丹念に集めてこの書を完成させた。この分野でこれ以上の著作は今後出ることはないと思う。郭氏がこの書に着目したのは賢明であったと言うべきか、あるいは当然であったと言うべきか。

またバビロニア天文学に関する研究は一九〇〇年ころの数十年がもっとも盛んで、また出版された著作はほとんどドイツ語文献である。筆者（成家）はドイツ語を得意とはしないが、今回は郭氏が利用したドイツ語文献に基づいて、バビロニア天文学を紹介したい。

郭氏の「釈支干」にはパソコンでは入力できないアルファベットの文字列がある。（図一）そういうものはここで画像として掲載する。まず本稿の記述上での約束事を述べる。

星座名について。

現在、日本で一般に使われている星座名は、おうし座、おひつじ座、うお座などで、学名はそれぞれ Taurus, Aries, Pisces で、古代ギリシアに由来する。ところが古代ギリシアの天文学は、バビロニア天文学を基礎として開花したことが分かっている。そして星座名もバビロニア起源のものが引き継がれた。動物名が多い。エレミアスの「古代オリエント」では、バビロニアの「おうし」、「おひつじ」、「うお」をそれぞれ Stier, Widder, Fisch と表記している。これらはもちろん現在の星座の起源であると考えられるが、それぞれが含む星群（あるいは星座の範囲）がたがいに同一であることはないであろう。よって、バビロニア星座と現代星座を区別して表記しなくてはならない。ここでは、現代星座の方はすべてカタカナを使ってオウシ座、オヒツジ座、ウオ座などと表記し、バビロニア星座の方はひらがなでおうし座、おひつじ座、うお座などと表記する。

これから述べる古代天文学の話は、図を見ないと理解しがたい内容が多い。よって、できるだけ図をたくさん掲載したいが、やはり誌面の制約があるから思うようには紹介できない。あとは、天文学方面の関連書によって補っていただくしかない。また、今は一般向けの便利な天文ソフトが市販されているので、これを利用するのもよいと思う。古代の星空をパソコン画面上に再現できる。

以下、郭沫若がバビロニア天文学を紹介して、中国古代の

ものと比較する記述である。ただし本誌の読者は天文学に詳しくないと思われるので、筆者（成家）が図や説明を増やして、分かりやすく記述する。本稿は『郭沫若全集・考古編一』収録の「甲骨文字研究」によって記述する。

ギリシアの十二宮はバビロニアに起源がある。バビロニアの十二宮のもとになる星座は、はるか昔、紀元前の六二〇〇年から四四〇〇年の間にすでに出現していた。

Alfred Jeremias, Handbuch der Altorientalischen Geisteskultur, s.203-204

しかし文献によって確認できるものは紀元前の四四〇〇年から二二〇〇年の間にある。紀元前二一〇〇年の記録 C.T. XXXIII 1-8 には月宿帯（月の通り道に当たる星座。中国では、まず二十七宿が形成され、春秋時代に二十八宿になった。拙著『キトラ古墳高松塚の壁画の系譜』参照）上にある十七の星座が列挙されている。

（図一。エレミアス原書二〇七頁を郭氏が中国語にしたもの。参考図版「現代星図」参照）

図一．月の通り道上にある星座

一．昴。現代、プレアデスと呼ばれる星団。オウシ座にある。

二．畢。現代、ヒアデスと呼ばれる星団である。オウシ座にある。

三．參。現代のオリオン座にある。

四．天船（二十八宿以外の星宿）。ペルセウス座にある。

五．大ふたご座。二十八宿の東井。フタゴ座にある。

六．天五黄（二十八宿以外の星宿）。ギョシャ座にある。

七．輿鬼。カニ座にある。

八．軒轅（二十八宿以外の星宿）。シシ座にある。

九．角。オトメ座にある。バビロニア語の原義は「禾」あるいは「穂」である。

十．e、亢。テンビン座。（亢はオトメ座にある。）

十一．房、心、尾。サソリ座にある。

十二．箕、斗。イテ（射手）座にある。

十三．牛。ヤギ座にある。ただし、ドイツ語表記は Ziegenfisch で、「半ヤギ半魚」と訳してよいだろう。上半身はヤギで、下

「月驛土之星宿」（據葉列柳士所補譯，HAOG.S.207）

一：mul Zappu 畢；二：mul GU.AN.NA 昴；三：mul Šitaddalu 參；四：mul ŠÚ.GI 培尔倩士（天船）；五：mul Tuâmê rabâti 大雙子（東井）；六：mul Qamlu 天五黄；七：mul AL.LUL 輿鬼（輿鬼）；八：mul UR.GULA 獅子（軒轅）；九：mul A[B.SI]N (EŠ.ŠIN) 少女（角）（原義為禾）；十：mul Zi-ba-ni-tum 天秤（氐亢）；十一：mul Akrabu 蝎（大辰房心尾）；十二：mul PA.BIL.SAG 射手（箕斗）；十三：mul Suhurmâšu 羊（牛）；十四：mul GU.LA 水瓶（女虚）；十五、十六：Zibbâti mul ŠIM.MAḪ mul Anu-ni-tum 南魚与北魚之尾（南魚之尾為奎，北魚在營室東壁下，雙魚全長畧等於室壁奎三宿）；十七：mul amêl Agru 白羊（婁胃）。

半身は魚という動物である。（図二）。

十四．女、虚。ミズガメ座にある。ドイツ語ではWassermannの他、Rieseとも表記している。巨人あるいは巨星の意味であ

Abb. 125. Der Wassermann vom Tierkreis von Dendera

Abb. 124. Tierkreisbild des Ziegenfisches vom Tierkreis von Dendera

図三．獣帯十二獣の一つ「水を運ぶ人 Wassermann」
前図と同じくデンデラ神殿のレリーフ。

図二．獣帯十二獣の一つ「半やぎ半魚」
エジプト・デンデラ神殿の天井に作られたレリーフ。
紀元前一世紀の作と考えられている。（参照　『星座物語』127頁、『天球図の歴史』26、27頁）これ以下、図四まですべてエレミアス「古代オリエント」より。

ろうか。（図三）この図はおそらく「水を運ぶ人」で、後に「水瓶座」の星座図に変化する。欧州中世以降の星座図は、現在出版されている星座関係の図書の中でよく紹介される。また千葉市立郷土博物館は中世近世の星図をたくさん所蔵している。同館は図録を出版して紹介しているので、これを見るとギリシャ起源の星座図がよく分かる。これらをオリエント出土の画像と対照させると、その淵源がここにあることがよく理解できる。

十五．と十六．獣環の中の南の魚と北の魚の尾。（南魚の尾は奎で、北魚は營室、東壁の下にある。双魚‐ウオ座の全長は室、壁、奎これら三宿にほぼ等しい。）奎はウオ座とアンドロメダ座にまたがっている。壁と室はペガスス座にある。

十七．婁、胃。オヒツジ座にある。

以下、エレミアス「古代オリエント」の獣帯星図に関する記述である。こういう知識を前提として郭沫若は十二支起源について考察した。これを理解しておかないと、この先が分かりにくい。よって簡単に紹介する。（原書二〇二～二〇四頁）

とにかく、月と太陽の「通り道」に当たる獣環星座は、部分的にはエジプトのヒエログリフ（非常に古い）を思い起こさせるという点はだれでも認める。獣環のバビロニア起源については誰にも異論はない。次の問題だけはまだ存在する。古代において獣環星座はどのように配分されたのか、およびどのようにしてしだいに発達してきたのか、そして、その確認されている十二の動物をもって呼ぶ獣環とはいったい何なのか。

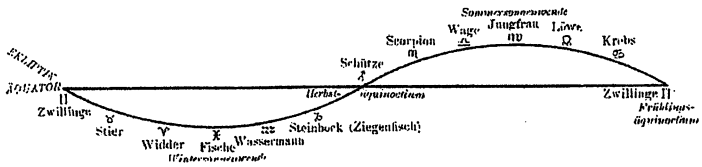


Abb. 120 a. Der Tierkreis, aufgerollt, ca. 6200—4400 v. Chr.

Lauf der Sonne: Frühlingsäquinoktium in den Zwillingen, Herbstäquinoktium im Schützen, Sommersolstitium in der Jungfrau, Wintersolstitium in den Fischen. Sämtliche Wassertiere in der Winterhälfte [Wasserregion, Unterwelt]

図四ａ．獣帯展開図　およそ紀元前６２００－４４００年
直線は天の赤道、曲線は黄道（太陽の通り道）。この図の右端、黄道と赤道の交点が春分点。この図ではフタゴ座にある。もう一つの交点は秋分点で、イテ（射手）座にある。夏至（最上点）はオトメ座に、冬至（最下点）はウオ座にある。水に関連のある動物は全般的に冬あるいは冬に近い時期（赤道の下）にある。

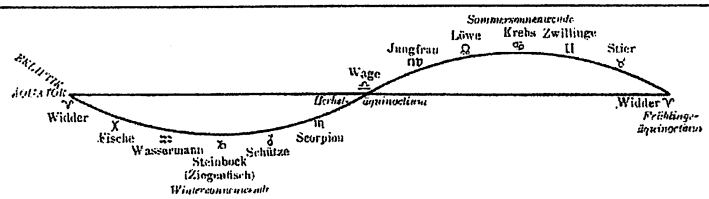


Abb. 120 c. Der Tierkreis, aufgerollt, seit ca. 2200 v. Chr.

Lauf der Sonne: Frühlingsäquinoktium im Widder, Herbstäquinoktium in der Wage, Sommersolstitium im Krebs, Wintersolstitium im Steinbock

図四ｂ．獣帯展開図　およそ紀元前４４００－２２００年
春分点はオウシ座に、秋分点はサソリ座にある。夏至はシシ座（ライオン）に、冬至はミズガメ座にある。

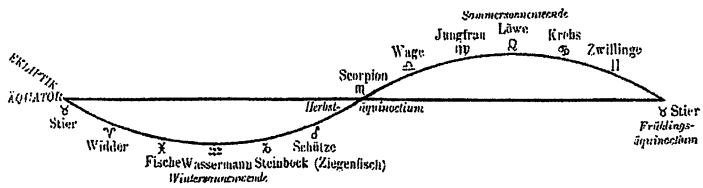


Abb. 120 b. Der Tierkreis aufgerollt, ca. 4400—2200 v. Chr.

Lauf der Sonne: Frühlingsäquinoktium im Stier, Herbstäquinoktium im Skorpion, Sommersolstitium im Löwen, Wintersolstitium im Wassermann

図四ｃ．獣帯展開図　およそ紀元前２２００年以降
春分点はオヒツジ座に、秋分点はテンビン座にある。夏至はカニ座に、冬至はヤギ座にある。

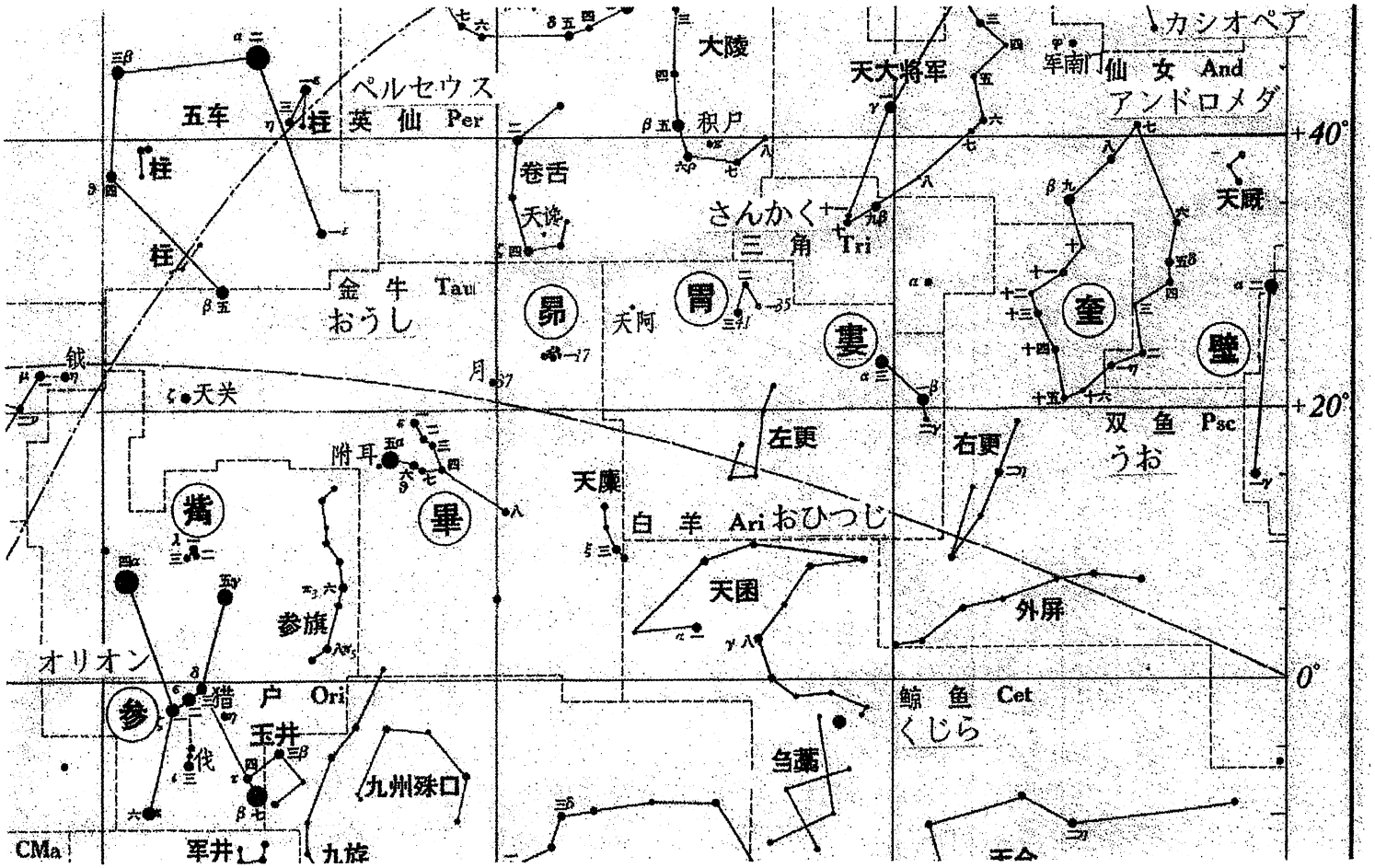
恒星群における配分は、そぼくな表象（星座の図）が独立している。つまり天上における通り道、そこを惑星が運行するが、は「天上世界」であり、天上の海洋に堤の高台（長く連なる高台）があり、海洋はそれによって境界を作られるが、またその上に、偉大な神々の家であるところの「住まい」（古代中国は「宿」と呼んだ）がある。

この海洋の堤に対するシュメール語の名称として我々は一三九頁で、UL.HE と GIR があり、それはアッカド語の Supuk same つまり天上世界の高台であることを見た。

ここには、宇宙の壮観があり、獣環がそこに組み入れられている。というのは、四つの動物、それは宇宙の玉座を運ぶが、はここでは雄牛、ライオン、鷲、人 Mensch であり、これらは星が測定された時代の後の四つの「世界の一角」であるところの獣環構成要素である（さそりの代わりに鷲が、人はすなわちみずがめ Wassermann に）。

古代の獣環に対するよく知られている疑問のために、エレミアスは純粋に天文学的な検討を提唱したいと考えた。これが考案された時代は、天文学的・暦学的に必ず説明できる時代に落ち着く。この時代は、三つの水に関連が強いと思われる動物 - ヤギ・水瓶 Wassermann・魚 - は実際にも湿気のある一季つまり雨季に属し、オリエントにおいては我々の冬季と合うから、正しい。獣環が宇宙的に固定していると思われていた時代には、もっとも下の星座はみずがめ Wassermann で、その右はやぎ - 半やぎ半魚（上半身が山羊で、下半身は魚）、そして左はうおである。（図四 a）これによって我々は天文学的時代を知ることができる。そこに、太陽の春分地点の星座としておうし座がある。この天文学的時代は、紀元前の四千年から二千年の間に指定される。だからハムラビ王の時代であり、ついにその終わりの時期に至って、この時期にはおひつじ座が春分星座となった。ゆえにそれ（おうし座）は、ハムラビ王時代の新年祭においても、帝国の神マルドゥクの啓示として宗教儀式上で尊敬された。雨季の月宿星座としての魚座、水瓶座、半やぎ半魚座を持つ獣環はだからハムラビ王以前においてすでに身近なものであったに違いない。ただし当時、他の空間がすでに九つの月宿星座で敷き詰められていたかどうかについてはもちろん証明されない。紀元前千三百年に属するボアズキョイ（トルコの遺跡）出土の「星表」は、春分星座としてのおうし座の近くにあるライオン（しし座）を欠いている。それは夏至の月宿星座として期待されたはずであるが。それはまたてんびん座も欠いている。そこではこの「死者の天秤 Totenwage」があり、この設定は最初はその天文学的時代に起こったに違いない。そこには春分星座ではおひつじ座だけがあった。だから最初はハムラビ王時代からのものである（図四 c）。

月宿の星として、その経路の最高地点を、夏至における太陽転換の月（暦の月）として合理的に受け入れなくてはならない。それは紀元前四千年紀、最初のシュメール文化絶頂期



参考図版　現代星図（春分点付近）日本名・中国名・学名・二十八宿　対照

のものと見てのみ正しい。そこではふたご座はひょっとしたら春分星座だった可能性がある。

我々は獣環と呼ぶが、それは月の通り道（白道）あるいは太陽の通り道（黄道）という概念であるが、この形成の始まりの時期、シュメール時代初期において当時の人はこれを探さなくてはならなかった。我々は、前文化時代の天文状況の関連付けさえも考慮に入れて考察しなくてはならない。というのは、我々が見るかぎりでは、ほとんどすべてのシュメール語の星名は伝えられているので。紀元前三千年という時代は起源の時期として、またその最も遅い時代まで、バビロニア時代は、虚構として受け取られるものは極めて少ない。それというのも、たくさんのテキストによって、その中にある数の記述は後から計算したものだが、それはこの時代に天文学的に利用された資料であるが、天文推算で確認されたからである。

獣環考案の時代およびバビロニア天文学の時代に関する重要な疑問は、獣環帯上の月もしくは太陽の通り道の始発地点の対応の仕方（始発地点が何星座に当たるか）と連結している。この対応の仕方は、年の始まりを考える上で決定的意味を持つ。

獣環帯の星に関する最も古い文献証拠は、我々がまもなく見るように、二千年前のある時代に由来する。そこでは春分始発（春分を年の始まりとする）のカレンダーが最終的に太陽転換カレンダー（夏至あるいは冬至を年始発とする暦）に打ち勝った。この時代に、太陽の春分地点はなおおうし座にあった（紀元前二二〇〇年にはプレアデスに）。しかしそれは、我々のおひつじ座の分野の入り口にあって、歳差のせいで徐々に移動していた。太陽の春分地点の星座としておひつじ座が重要であった時代は、およそ紀元前二千年からという見方だけが天文学的に正しい。

【資料】

Alfred Jeremias, Handbuch Der Altorientalischen Geisteskultur, 第二版 Verlag von Walter de Gruyter & co. Berlin und Leipzig 1929

天文資料解説集 No.3『東西の天球図』 千葉市立郷土博物館 二〇〇二

天文資料解説集 No.1『グロティウスの星座図帳』 千葉市立郷土博物館 一九九九

平成七年度特別展図録『星座の文化史 - 古星図と天球儀に描かれた星座たち』 千葉市立郷土博物館 一九九五

ニュートン別冊『星座物語』教育社 一九九二年十二月

広瀬秀雄、中野繁 共著『全天恒星図』 誠文堂新光社 一九八七年第三版

ピーター・ウィットフィールド著、有光秀行訳『天球図の歴史』ミュージアム図書 一九九七

原著者 A.P. Norton、訳述者 李元等『星図手冊』 明文書局 台北 一九九五

伊世同主編『全天星図』地図出版社　北京　一九八四
荒木俊馬『西洋占星術』恒星社厚生閣　一九六三
成家徹郎『キトラ古墳高松塚の壁画の系譜』
大東文化大学人文科学研究所　二〇〇四

この本は非売品である。ただし図書館や研究所等の機関からの希望があれば寄贈してくれることになっている。

電話 03-5399-7325

天文ソフト『ステラナビゲータ』
発売　アスキーasciisolutions.com

☆訂正

前号第八号掲載の拙稿の中に間違いがありましたので、訂正してお詫びします。

図8の説明。㊨紀元前一一〇〇〇年㊧とありますが、㊨紀元前一一〇〇年㊧の間違いでした。

郭沫若のロマンチシズム―「炉中煤」から思いつくこと

岩佐昌暲

『創造十年』によれば、郭沫若は五四以後の中国に恋情にも似た感情を抱いていた。彼はこう書いている。

「宗白華がドイツに留学に行ったとき、僕自身は逆に中国に帰りたいと思った。「五四」以後の中国は僕の目にはまるでピチピチして進取の気象に富んだ娘に見え、彼女はそのまま僕の愛人のような気がした。僕の『鳳凰涅槃』という詩は中国の再生を象徴している。「祖国を思う気持ち」を述べた『炉中の石炭』は、僕の彼女に対する恋歌だった。『お早う』と『匪徒の頌』は、いずれも彼女にたいする賛辞だった」（松枝茂夫訳を一部改めた）

ここにあげられた詩は、従って五四以後の中国に対する彼の祖国愛を歌った（あるいは詩の底流には祖国愛がある）ものとして読まれてきた。特に『炉中煤』は「眷念祖国的情緒」という副題も手伝って「五四時期の代表的な愛国詩」（厳家炎）という評価が定着している。小文も『炉中煤』を取り上げるが、主題レベルでは定評に付け加えることはない。実は私はこの詩を会報第二号で訳したことがあるが、小文ではそのとき翻訳をしながら、うかんだ疑問や思いつき的感想を書きたい。

まず疑問だが、郭沫若はどういうきっかけでこの詩を着想したのだろう、というごく素朴なことがらである。詩の末尾に「一九二〇年一、二月間の作」と記されているから、季節は冬、ストーブの中で燃える石炭を見て思いつかれたものだろうということが、まず考えられる。九州大学石炭研究所の東定宣昌教授とお話していたとき、博多では大正期には家庭の燃料に石炭を使う家が少なくなく、近郊から石炭売りが来ていたことなどを伺ったことがある。郭沫若とアンナが家庭で煮炊きや暖房に石炭を使っていたかどうかは分からないが、

そういう話を聞くと全くありえないわけでもない気がする。一番可能性の強いのは大学でストーブにあたりながら着想した、ということだが、当時九大の医学部の教室で石炭ストーブを使っていたのだろうか。これも調べてみたが、あまりはっきりしない。玩物喪志と叱られるかもしれないが、こういうことも詩の読みを深めるには役立つと私は本気で考えている。もう少し調べてみたい。

次は思いつき的感想で、一つは、石炭のような長期にわたって地中深くに埋蔵されているモノに自分の感慨を託す手法（あるいは発想）、大げさに言えばここには中国文人の感慨の述べ方のある型があるのではないか、ということ。もう一つは、これはもっと大きな話になるが、この詩には郭沫若の詩意識（あるいはロマンチシズム）のある欠陥が示されているのではないかといったことである。

最初の方は、文革後に書かれた詩に「真珠」や「化石」を素材にしたものがあった、という記憶からの連想である。五十年代の政治運動の中で批判され詩壇を追われた詩人たちが名誉回復されて詩壇に復活してきたとき、長期にわたる自分の沈黙の時期を真珠や化石に喩えて歌った詩人たちがいた。例えば艾青がそうである。詩壇復帰後の彼はそういう詩を次々と書いた。海底に沈んだ化石や貝を書いた『魚化石』、『虎斑貝』。地中に埋蔵されたダイヤモンドの原石を素材に感慨を述べた『互相被発現』など。付け加えれば艾青には初期に同様の詩想で書かれた『煤的対話』がある。蔡其矯には『真珠』と題する詩が、周良沛にも『真珠』がある。いずれも同じ詩想による詩である。こうした詠物詩の系譜の源流にこの『炉中煤』を位置づけられないか、という思いつきだが、どうであろうか。

最後の感想は、郭沫若が石炭について書きながら、その想像力を石炭を掘る人間にまで及ぼしていないということに関わっている。同時代の詩人に石炭を題材にした人がいるかどうか、いま資料がない。やや時代が下ると、鉱山労働者を直接書いた唐祈『挖煤工人』がある。石炭採掘現場の劣悪な環境と、そこに働く採掘工の悲惨を描いた名品である。ここには石炭を掘る労働者への同情と共感がある。だが郭沫若の詩にそういう視点はみられない。

郭沫若の詩にも「炭鉱労働者」は出てくる。有名な『地球、我的母親！』には「地球よ、わが母よ！／ぼくが羨ましいのはあなたの寵児、かの炭鉱の中の労働者だ！／彼らは全人類のプロメテウスだ／あなたはいつも彼らを抱いている。」という一連があり、郭沫若はそれに注を付してプロメテウスが天上の火を人間に伝えたために神の怒りにふれたギリシャ神話の中の神の一人であることを紹介している。また同じ時期、郭沫若が次々と生み出した詩群には祖国や同胞がしばしば現れる。例えば『晨安』は「おはよう！わが若い祖国よ！／おはよう！わが新生の同胞よ！」という挨拶が書き込まれている。

だが、詩に登場する「炭鉱労働者」や「同胞」は、決して生身の骨肉をもった人間ではないことに気づく。「おはよう」の挨拶をうける同胞は、「常に動いてやまぬ大海原」や「詩の

ように湧き出る白雲」と並列におかれている。彼の詩のリズムとイメージを成立させる素材として使われているにすぎない、と私には思える。同様なことは、港湾都市・門司の実景を描いた詩『筆立山頭展望』についても言える。彼が「黒い牡丹花」に喩えた汽船の吐き出すもうもうたる煙は勃興期の日本資本主義の躍動の姿を象徴するものだったが、それは同時に近代産業が生み出す環境破壊の光景でもあった。同時期福岡のジャーナリスト菊竹六皷が北九州「八万市民の生命を脅威して」いる「雲霧のような降灰」を告発しているが、煙の下で苦しむ庶民は郭沫若の視野には入っていない。

こういうことから私の感想はやや短絡的にある結論に向かって動き出す。初期郭沫若詩のロマンチシズムは現実を形成する正と負から、負を捨象することで成り立っていたのではないか、と。彼のやはり代表作の一つ『天上的市街』は星空の彼方の空想の町を描いている。生きた人間が生活していない、夜空に浮かぶ美しい都市、掘る者への視線を欠いた石炭、その下で暮らす庶民に思い及ばない煙の賛歌、それは同根のものであり、図らずも彼のロマンチシズムの本質のある側面を言い当てているのではなかろうか。（二〇〇七年一月）

丸山昇氏と郭沫若研究

武　継平

丸山昇氏が御逝去されたことを知ったのは去る歳の瀬だった。東京にいる友人からの電話で訃報を知ったとき、衝撃が走った後、長い時間言葉にできぬ寂寞感と空虚感に溺れていた。ぼくは弟子ではないし、追悼文を書く資格もないが、同じ現代中国文学の研究に携わる後学の徒として、日本の郭沫若研究における丸山氏の貢献を振り返りながら当研究会およびぼく個人との些かな関わりについて触れてみたい。おこがましいと思われるかもしれないが、それでも小文をもって丸山氏を悼む気持ちを伝えたい。

ある意味では、日本の現代中国文学研究において、丸山昇氏が一種の道しるべ的な存在だとぼくは思っている。それは決して魯迅研究においてだけではない。郭沫若研究においても同様なことが言えると思う。

ぼくは大学四年の時、東洋文庫から出た郭沫若自伝を読んで訳者である小野忍と丸山昇両氏の名前を知った。郭沫若への丸山氏の関わりも確かそうした翻訳からだったと思う。東洋文庫は文化大革命が発動された翌年の十月から一九七三年一月までの間、郭沫若自伝全六巻を出版している。小野忍と丸山昇両氏の共訳だった。月日が経つにつれこの六巻自伝の邦訳が多くの人々の記憶の中から遠ざかりつつあるだろうが、それこそ日本人の一般読者が郭沫若という人と創造社文学の

周辺を知る最初のきっかけであり、またその後に徐々に広がっていく日本の郭沫若研究の土台でもあるとぼくは思っている。この六冊の、ハードカバーで若草色の本は大学図書館はいうまでもないが、一般の県民市民図書館にもだいたい所蔵されている。掌サイズだから何気なくポッケに入れ、家の近所の河川敷で小川の流れる音を聞きながら読むのが好きだった。とくに第二巻と第三巻は何遍読み返しても飽きなかった。

各巻の書誌情報を調べた。せっかくだから、ここに記しておく。

（郭沫若自伝一）『私の幼少年時代・辛亥革命前後』
郭沫若 著，小野忍・丸山昇共訳，東洋文庫一〇一，
平凡社 1967年10月出版。

（郭沫若自伝二）『黒猫・初めて夔門を出る・私の学生時代・創造十年』
郭沫若 著，小野忍・丸山昇共訳，東洋文庫一二六，
平凡社 1968年11月出版。

（郭沫若自伝三）『続創造十年・今津紀遊・山中雑記・水平線下他』
郭沫若 著，小野忍・丸山昇共訳，東洋文庫一五三，
平凡社 1969年12月出版。

（郭沫若自伝四）『北伐の途上で・今日の蒋介石を見よ。蒋介石のもとを去って・海濤集』
郭沫若 著，小野忍・丸山昇共訳，東洋文庫一七八，
平凡社 1971年1月出版。

（郭沫若自伝五）『続海濤集・帰去来』
郭沫若 著，小野忍・丸山昇共訳，東洋文庫一九九，
平凡社 1971年1月出版。

（郭沫若自伝六）『抗日戦回想録』
郭沫若 著，小野忍・丸山昇共訳，東洋文庫二二四，
平凡社 1973年1月出版。

全六巻のうち、第三巻と第五巻は第九回日本翻訳出版文化賞を受賞しているらしい。

これらの翻訳作品を除いて、丸山氏は一九七〇年代において郭沫若研究の論文を発表していた。そのうち、汐文社が出した『世界の文学』(1974.7) 掲載の「創造社と郭沫若・郁達夫」、日中出版から出た『中国研究』(九十四号) 掲載の「郭沫若氏のこと」と『朝日アジアレビュー』(三十五号) 掲載の「郭沫若：その一面」がよく知られている。

さらに、平凡社から出た『国民百科事典』(三)、一九八五年東京堂出版から出た丸山昇、伊藤虎丸、新村徹共編『中国現代文学辞典』および一九九四年小学館が出した渡辺静夫編『日本大百科全書』(五) などの大事典類の「郭沫若」の項は、いずれも丸山昇氏の執筆だった、ということも忘れないでおこう。

途中話が変わって申し訳ないが、ここですこし私事に触れてみよう。

ぼくは日本現代中国学会二〇〇五年名古屋全国大会で丸山氏にお目にかかったのが最後だった。杖が必要となった氏は顔色も悪く、週二回人工透析をやっているということで、声

を出す気力さえないほど衰弱していた。それでも目力はいつもと同じように鋭かった。休憩の間、ぼくが何か聞きたがっていると察しがつかれたのか、そばにいらっしゃって、「久しぶりですね、武さん。」「どうですか、郭沫若研究会は？うまくいっていますか」と声を掛けてくれた。われわれの研究会報は創刊号から毎回発行時には必ず丸山氏に一部送らせていただいており、ぼくは時々ご教示を乞う意味で自分の論文を同封したりしていた。それでぼくはここ数年郭研の活動を掻い摘んで報告し、氏の郭沫若論ともいうべき論文「郭沫若の一面」の当研究会報での再掲載をご快諾くださったことに改めて感謝の意を表した。わずかな時間の会話だったが、最後には、「今体調が悪いから、抱えているものだけでも精一杯です。元気になったら何か書いてあげますよ」と当研究会報の執筆まで約束してくれた。

ぼくは中国文学研究の分野に足を踏み入れた当時から丸山氏の書いたものを愛読していた。だが、はじめて面と向かって言葉を交わしたのが一九一九年九州大学で開かれた日本現代中国学会の会場だった。ぼくは「郭沫若の初期小説について」を題に発表することになっている。当日はちょうど朝から台風が襲来する日だった。午前一番目の発表だから、強い雨風の中、聞きにきてくれる方はどのぐらいいるのだろうかと不安だったが、会場の席はほぼ埋まっていた。質疑応答の際、丸山氏が二度も席をお立ちになってぼくに厳しい質問をしたことと、ぼくが東大の代田さんに反論されてたじたじとなり、緊張のせいで何度も噛んだことなど、今でも忘れられない。

その後ぼくは自分の納得のいく論文が書けたら必ず抜き刷りを一部丸山氏に送るようにしていた。とにかく厳しいコメントがほしかった。しかし、丸山氏はいつも「郭沫若研究ですか。わたしはしていませんよ。翻訳はすこしやりましたけどね」と謙虚な姿勢を変えたことがない。

日本郭沫若研究会が正式に発足したのが二〇〇三年の一月だが、実はその前の年の晩秋から暮れにかけて数ヶ月間の「胎動期」があった。研究会報創刊号が出される前の準備段階だったので、研究会設立の趣旨を学界に伝え、方々に支持と入会を呼びかけていた頃だった。研究会報準備号を出したあと、すぐに共鳴してくださった方がわずか数名しかいなかった。が、中には丸山昇氏がいた。入会はされなかったが、わざわざ支持表明の手紙を呼びかけ人の一人だった岩佐昌暲先生宛に送ってきた。七〇年代半ばから低迷が続く日本国内の郭沫若研究の現状に対する不満、そして好き嫌いという研究者の個人感情を超えて中国現代文学における重要な研究対象として郭沫若を捉えるべきだという観点においては、われわれと共感を持っている。そのことを思い出すたびに感無量で胸がいっぱいになる。とくにあの時の手紙は、発足時のわれわれをどんなに励ましてくれたことか。

ぼくは丸山氏とは個人的な付き合いはほとんどないと言ってもいい。しかし、こころから氏を敬愛し、常に自分が先達が築き上げてくれた土台の上で郭沫若ないし創造社文学の研究をしているのだ、そしてその研究を受け継いだからには、

それを深めていく使命があるのだと感じている。

丸山昇氏は専門分野が中国現代文学だが、戦後以来の日本人のトップレベルの知性を現しているとぼくは思っている。そういう意味で、研究界にとって、氏を喪った痛手は想像以上に大きいに違いない。

丸山先生、どうぞ、安らかにお眠りください。

（二〇〇七年一月・京都）

郭沫若と朝鮮

藤田　梨那

郭沫若と朝鮮の関係は大まかに三つの時期に分かれる。第一期は一九一四年から一九二三年の留学期。第一次世界大戦や関東大震災などの歴史事件があった。作品としては、「牧羊哀話」「狼群中一隻白羊」「百合と蕃茄」がある。叙情的特徴を現している。

第二期は一九二八年から三七年の亡命期。日本の大陸進出やプロレタリア運動に対する鎮圧、在日朝鮮人労働者問題など、激動な時代であった。郭沫若は政治亡命者として身を潜め、文学作品はほとんど書けなかった。彼がおもに中国古代社会研究や古代文字研究に精力を注いだ。『中国古代社会研究』『青銅時代』などをまとめた。しかし、このような科学的な社会研究は却って彼に物事に対するより客観的な観察力を身につけることになった。一九三五年頃から執筆された身辺小説や自伝小説にこのような特徴が認められる。「鶏之帰去来」はよい例である。私はすでに論文「郭沫若《鶏の帰去来》に見る変形的抵抗と対朝認識」において三〇年代日本の朝鮮人労働者問題に対する郭沫若の捉え方と描き方を分析した。この作品は朝鮮人労働者問題を客観的描写することによって、作者の反植民地統制の態度を表している。この時期、在日朝鮮人や日本のプロレタリア文学者との接触や彼らに対する関心という問題はまだ解明する余地があるように感じる。

第三期は一九五〇年以後である。この時期においては朝鮮戦争が大きな事件であった。すでに国家政治に参与した郭沫若は朝鮮に対していままでと異なった見方、表現の仕方を取るようになる。朝鮮戦争については、郭沫若はほとんど戦争開始の時から積極的に発言した。一九五〇年六月二十五日朝鮮戦争が勃発して、翌月の七月一日に彼はテレビを通してアメリカと李承晩を非難する講演を行った。「傀儡より更に醜い」、「鬼顔が怖くない」などの文章を発表して、アメリカを非難した。また同年八月十一日から二十二日にわたり、中国人民代表団を率いて朝鮮を訪問した。その際に「訪問朝鮮」という紀行文を発表している。

郭沫若が再び詩歌に朝鮮を歌ったのは一九五一年頃である。『郭沫若全集』の中で朝鮮戦争に触れた最初の詩は一九五一年二月の「火焼紙老虎」である。これはスライド劇の形の詩である。一．序幕、二．美帝発動侵朝戦争、三．中国人民，工農

青婦開討論会、四.抗美援朝的怒涛、五.聖誕節前的白昼夢、六.中朝人民大勝利、という章立てになっている。この劇詩はほぼ朝鮮戦争開始から中国人民志願軍が戦争に介入し、朝鮮人民軍と共に三十八度線を突破し、ソウルを収め、南韓の釜山に迫った頃の状況を背景とする。郭沫若はすぐにこの詩を発表しなかった。一九五三年に『新華頌』に収めて、公にした。この詩集に収められた朝鮮題材の詩は七篇である。後の『長春集』(1957)の五篇、『潮集』(1959)の二篇、『東風集』(1963)の一篇と比べて、最も多い。これらの詩は当時中国で大量に創作された戦争文学と同じように、政治宣伝の色彩が強く現れている。「火焼紙老虎」は朝鮮と中国を舞台に、日本の殖民統治から解放された朝鮮の様子を朝鮮の歌「平和な鳩の歌」と共に美しく描く。アメリカの対朝侵略、戦争の破壊を描き、朝鮮人民軍と中国人民志願軍の勇敢な反撃を謳歌した。郭沫若が朝鮮を作品の題材にした第一期、第二期と比べ、民族の独立というテーマは共通しているが、第三期の詩歌にはどうしても政治性、宣伝性が強く出ている。東西冷戦が激化する最中に生まれたこれらの作品をわれわれはどう見るべきか、どう評価するか。これは国家政治に参与した後の郭沫若文学を評価する際の大きな課題の一つではないかと思う。

戯曲『屈原』の中国における出版史

權　五明

筆者は修士論文「郭沫若の歴史劇『屈原』の研究」(2004年度九州大学大学院比較社会文化学府に提出)において、郭の代表作『屈原』を考察した。その後、現在も郭の歴史劇の考察を続けている。この小文では、戯曲『屈原』の中国における出版史についてかんたんに紹介したい、と思う。

まず、戯曲『屈原』の出版史について述べる。この作品を最初に掲載したのは、重慶で刊行されていた国民党機関紙『中央日報』の副刊である。一九四二年一月二四日から二月七日まで連載された。以下の通りである1。

第一幕……一月二十四～二十五日
第二幕……一月二十七～二十八日
第三幕……一月三十～三十一日
第四幕の一部……二月四日
第四幕と第五幕第1景の一部……二月五日
第五幕第一景と第二景の一部……二月六日
第五幕第二景……二月七日

戯曲掲載終了直後の二月八日の『中央日報』には、郭自身の「『屈原』を書き終えて」と題する文章が掲載された2。

戯曲『屈原』は一九四二年一月二～十一日に創作された。これを知った重慶地区の新聞社や雑誌社は、郭沫若にその作品の掲載を求めたという。郭は、『中央日報』編集部に在職し

ていた孫伏園の要請に応じて作品を『中央日報』副刊に連載することにした。この決意の背後には、郭ならではの政治的判断があった。当時、郭は身近な友人にたいして次のように語ったという。「私がまだ「文化工作委員会」の主任であるからには、国民党の新聞は私の戯曲を発表させるだろう。『屈原』を国民党の『中央日報』に発表するならば、将来の上演闘争に有利になる」。しかし、一九四〇年十一月以降「中央図書館雑誌審査委員会主任委員」と『中央日報』総主筆」とを兼任していた国民党右派の潘公展は、「われわれの新聞がわれわれを公然と罵る作品を載せるなどとは」と激怒した。孫伏園は、このために編集の任務を解かれたという3。

以上のように、『屈原』は政治的な衝撃を与えながら登場した。しかし、すぐに独立した著作として刊行された。抗戦時代では、一九四二年三月に重慶の文林出版社がまず刊行し、重慶の群益出版社も同年刊行した。群益出版社は一九四四年七月、四六年にも再版した。共和国建国以降についていうと、最も早い時期の出版では一九四九年に北京の人民文学出版社が、四九年十二月に上海の群益出版社が刊行した。その後、一九五一年八月に上海の新文芸出版社が刊行した。一九五二年九月、五三年、五四年には、北京の人民文学出版社が再版した。五四年には、上海の新文芸出版社も再版した。五〇年代（五三年以降）には、演劇作品を中心に出版する北京の中国戯劇出版社も刊行した。五〇年代後半には、北京の人民文学出版社によって郭沫若文学選集の刊行が始まった。戯曲『屈原』は一九五七年三月に刊行された『沫若文集』第三巻や、五九年に刊行された『沫若選集』第二巻第四輯に収録された。文化大革命時代には、郭沫若の作品も否定され、刊行は止められていた。文革終結後の一九七九年になり、郭の郷里の四川人民出版社が刊行した『郭沫若劇作選集』に再録された。

この後、再び刊行のブームが起った。一九八〇年に刊行された『沫若選集』第二巻第四輯（人民文学出版社）、八一年に刊行された『中国話劇選』第一巻（上海文芸出版社）、八二年十月に刊行された『郭沫若劇作全集』第一巻（中国戯劇出版社）、八六年十月に刊行された『郭沫若全集・文学編』第六巻（人民文学出版社）などに再録された。また、一九八〇年にはアラビア語訳やドイツ語訳が外文出版社から刊行された。近年では、一九九七年二月に刊行された『郭沫若作品経典』第二巻（中国華僑出版社）、九七年八月に刊行された『郭沫若選集』第二巻（人民文学出版社）などに再録されている。

以上に、戯曲『屈原』の今日までの出版経過を紹介した。郭沫若著作の刊行は今日でも盛んであるが、私見では『屈原』が特別に注目されているわけではないように思われる。周知のように、『屈原』の主題は愛国主義、中華民族主義の提唱であった。近年の中国における愛国主義教育の隆盛を考えると、『屈原』にたいする注目度がもっと高まってもよいのではないか、と思う。

注

i『郭沫若専集』第二巻、四川人民出版社 1984, p202-203 参照し幕景を確認した。

ii「写完『屈原』之后」は、のち『沫若文集』第三巻（人民文学出版社 1957.3）に収められたときには、「我怎様写五幕史劇『屈原』」に改題された。

iii 黄中模「雷電的光輝・歴史劇『屈原』首次演出前后（節録）」、《中国当代文学研究資料》叢書編輯委員会編『郭沫若専集』第一巻、四川人民出版社 1984.p818-819.

【翻訳鑑賞】

矛盾の統一[1]

郭沫若　原作
大高順雄　訳

上海の歯医者は本当に高くて驚くばかりである。歯を一本抜くと、通例六銭[2]取られる。抜いた後、入れ歯にすれば別にお金を取られるのは言うに及ばない。私はまだ有難いことに、虫歯は一本もない。歯医者代がどんなに高かろうとも平気である。彼はどんなに値段を吊り上げても、私にはどうでもよい。しかし私の妻は苦しい目に遭うことになった。妻の口は虫歯だらけである。彼女が身ごもる時になれば、きまって更に多くの虫歯に苛まされる。今がまた歯痛の時である。毎晩、痛くて眠られない。たとえ歯医者に掛かろうとしても、家には支払うお金はそんなにたくさんない。仕方がなくやむを得ずコカインを時々塗って、対症療法をするしか方法がなかった。今朝、彼女はまた虫歯が痛んで耐えられなくなった。「コカイン」さえも効き目がなくなった。仕方がなく已むを得ず寝させるが、もちろん床に寝させるしかない。

今日は旧正月三日である。我が家には客をもてなす場所が全くないので、新年の挨拶に来る事をひたすら恐れていた。一階の客間には、祝君の家族がまだ寄寓している。二階は人を通す所でないことは言うに及ばない。しかし不幸、実は意外に幸福だったことに、午前十時ごろ、誰か家の裏門を叩く音がした。私が裏門を開けて見ると、来たのはT君とG君だった。二人は私を見ると、「おめでとう、おめでとう」と挨拶したが、私は慌てた。一体どこへ招き入れたらよいのだろう。私が躊躇っているうちに、T君は私に言った。

「また客がいるよ。女の来客です。」

私はこの言葉を聞くと、更に驚いて手足が震えた。ああ、一体どうすればよいのだろうか。はたして表門の外からG夫人とT夫人が入って来た。G君の夫人は去年ようやくアメリカから帰って来た。彼女の狐皮に包まっている姿が目に入ったが、顔は見えなかった。彼女が我が家に来たのは、これが最初だった。T君の夫人は日本に留学したことがあり、私の妻と昵懇の仲である。私を見るや否や、とても心配そうに尋ねた。

「奥様はいかが。」

「歯痛で、二階で臥せっております。」と私は答えた。

彼女はこの言葉を聞くと、二階へ上がって妻に会おうとした。ハイヒールを脱ぐと、もう階段を二段上った。ああ、ど

うしたらよいのだろう、どうしたらよいのだろう。

「靴を脱がなければならないのかしら」とG夫人が尋ねた。

「こちら様の生活は日本式なのよ」とT夫人が私の代わりに説明した。

「靴を脱がなければならないの。それなら私は上がれないわ。」

ああ、助かった。天に謝し、地に謝する。私は心の中でT夫人に感謝したことは言うまでもないが、実際その五万倍もG夫人に感謝した。G夫人は上がれないと言ったので、皆さんが足を止めた。T夫人は階段を降りて来た。私はその時ようやく、頭が働き始めたらしく、こう誘った。

「フランス公園へ行って腰を下ろしたらどうでしょう。まことに悪いけれど、我が家には腰を下ろすところがありません。」

しかしT君もG君も断り、新年の挨拶をしに行かなければならない家がまだあるので、これでやむを得ずお暇すると言った。ああ、私は心からG夫人に感謝し、本当に彼女のハイヒールに感謝する。もし彼女らが二階へ上がったら、あの豚小屋か犬小屋同然の二階部屋と乞食同然の家内を目にするだろう。もし彼女らがこの有様に同情したならば、私の自尊心が傷つけられただろう。もし彼女らが同情しなかったとしたら、彼女らの自尊心が傷つけられはしなかっただろうか。ああ、私は心からG夫人に感謝し、本当に彼女のハイヒールに感謝する。二階へ上がるには靴を脱ぐという、日本の習慣が私を救ったのである。女性は靴を容易に脱がないという、西洋の習慣が私を救ったのである。よかった、何もかもよかった。異なる二種類の習慣は、まったく相容れないが、この時ちょうどうまく融合して私を救ってくれた。私はここで誰に感謝すべきだろうか。「破れた粗末な綿入れを着て、狐や狸の毛皮を着た人と並んで立っても、恥ずかしがらない」。Gは、普通の人のなし得るところではない。私自身は天理と良心にかけてこう言っておく。「私自身の物質的欲望は一般の人に比べて決して弱くない。そして私自身の不善を恥じる心も一般の人に比べて決して鋭敏でなくはない。」孔子先生よ、孔子先生よ、あなたが子路を褒めた意味を私は今ようやく、深く理解できました。

【訳者あとがき】

「矛盾の統一」は郭沫若が身近な出来事を現実主義的な短編に表わし、自分の人生観を明確に表現したものであり、文学者郭沫若の力量を端的に代表する。末筆ながら、素訳全文に目を通して下さり、種々の質問に快くお答え頂いた于亜先生（大手前大学講師）に深謝する。

注：

1．最初「洪水周年増刊」（上海 1926.12.1）に「矛盾的調和」という原題で発表。〈中国研究文献二〉『創造社資料』第六巻 伊藤虎丸編「洪水周年増刊」アジア出版 1979 年。拙訳は『郭沫若全集・文学篇』第九巻 p481-420. 人民文学出版社 1985.

2．一九二六年の洪水周年増刊の値段は、毎週銀貨二分、半年二

十六期五角、一年五十二期一元だった。一銭＝一元＝一〇角とすると、六銭はこの雑誌六年分。

3．原注。「新釈漢文大系一」『論語』p213，吉田賢抗著、明治書院昭和三五年：「子罕第九」二三二。「子曰，衣弊縕袍，與衣狐貉者立，而不恥，其由也．不忮不求，何用不臧」。　孔子が言う、破れた綿入れの羽織を着て、狐や狢の外套を着た人と並び、恥ずかしがらないのは子路である。妬みも求めもしないのは、何と結構なことではないか。

【第三回日本郭沫若研究会総会報告】

二〇〇六年十月二十二日和光大学にて総会が開催された。一、会務報告；二、役員選出；三、当面の会務の執行；四、会員の入退会；五、入退会規則の制定；六、会計報告等の議題について、研究会岩佐代表より報告、そして会員の討論があった。参加者：岩佐昌暲、藤田梨那、山田敬三、新谷秀明、成家徹郎、中村俊夫、斎藤孝治。

今回の総会で、当研究会創立時の規約の一部改正案が議論されたあと承認された。

一、現行研究会代表体制を会長、副会長新体制に改める。会長は岩佐昌暲、副会長は藤田梨那、事務局長は武継平が新たに選出された。武は二〇〇七年春上海財経大学勤務に変わるが、会報編集担当を継続する。事務局は現在の立命館大学文学部武研究室から熊本学園大学外国語学部岩佐研究室に移転する。当分会員名簿の管理、ＨＰの管理は岩佐氏が、会費口座の管理、会報の印刷発送、会員連絡事務等は藤田氏が引き受けることとなった。会計監査は横打理奈と郭偉。

二、会報第九号の投稿募集〆切は十二月二十日となる。

三、今後『日本郭沫若研究論文集』を刊行したい。（事務局）

【蔡震氏の東京講演会】

中国郭沫若学会副会長蔡震氏は、さる十一月十六日に来日し、翌日二松学舎大学にて、「国防文学論争について―茅盾が忘れた郭沫若宛ての二通の手紙」という題で講演を行った。この講演会は日本郭沫若研究会と聞一多学会が合同で開催したものである。当日午前十時半から十二時にわたり、講演と討論が行われた。二十七名の出席者があった。丸尾先生、中村先生も出席された。講演はいままで知られていない茅盾、潘漢年が郭沫若に送った書簡と回想録に基づきながら、国防文学論争の内情を具体的に推論した。この論争に対する評価を妨げる要因についての分析も説得力があり、大変充実した内容であった。講演会後、二松学舎大学の教員レストランで、千鳥ヶ淵、靖国神社を展望しながら、参会者が昼食を取り、歓談を続けた。今回の講演会と昼食会は二松学舎大学教授竹下先生に大変お世話になり、深く感謝する次第である。十八日夕方、日本郭沫若研究会の会員五名が蔡先生を囲んで、夕食会を開いた。意見交換を行った。（藤田）

【編集後記】◆武継平事務局長が四月から上海財経大学教授として赴任することになった。身は上海にあっても本会事務局長である。今号の編集は彼の日本での最後の仕事になった。ありがとう武さん。◆昨年十一月丸山昇先生が逝去された。本会誌にも原稿を寄せてくださり、激励をしてくださった。ご冥福をお祈りする。（岩佐）